

佐々木五三郎と東北育児院の創設 (一)

工 藤 陸 男

まえがき

明治三十五年秋、佐々木五三郎は異常気象による大凶作によって弘前市内に飢う孤児貧兒を見るに忍びず自宅に収容保護し、東北育児院を開設した。これは当地方における社会福祉事業の草創である。当院は昭和六年弘前愛成園と改称し、現在、東北有数の福祉施設として隆々発展し、昨年百周年を迎えている。

本稿においては、この佐々木五三郎の生家と生い立ち、東北育児院創設の動機、東北育児院創設と新院舎の建設に焦点を据え考察したものである。

一 佐々木五三郎の生家と生い立ち

(一) 生 家

佐々木五三郎は明治九年六月十日、佐々木新蔵の三男として弘前城下の紙漉町に生まれた。父新蔵は紙漉師であったが、製紙、製糸、製陶、製瓦などの工場を手広く経営していた事業家であった。

父新蔵は『佐々木元俊先生』の中に次のように記されている。

四男新蔵は長兄元俊先生の晩年の活動の如く製紙業、製糸業、製陶業、製瓦業等の事業を起して居る。即ち製紙業は維新前より

始めて居ったもので、其功により帶刀を許されて居った、明治以降に於ても男女数十名の職工を日日使用して、雁皮、奉書、仙過、唐紙、美濃紙、手紙、手切等の製紙を産出し、県庁其他の用紙をも供給したとの事である、

(中略)

製糸工場には女工数十名を雇ひ、地方の繭を買集め、製糸を行ひ、輸出をなした。

瀬戸焼は長兄元俊先生の所有地九十九森境内に大工場を建造し、京都より職工吉兵衛と云ふ者を招き良土を京都よりも取寄せ製造した、此の焼物には吉兵衛焼の称もある、同時に製瓦の業も行ひ、青森聯隊営舎用の瓦は同氏の製造納付せしものとの事である。なお同氏の家の瓦葺は当地瓦家根の元祖なりとの称もある。¹⁾

すなわち、これによると父新蔵は長兄元俊の影響を強く受けて製紙業、製糸業、製陶業、製瓦業などの事業を手広く営んでいることがよくわかる。製紙業は維新以前より始めていてその功によって帶刀を許されていたのである。紙漉町はもともと和紙を作るための職人町として、元禄時代に建設されたところであり、清水が湧き出る所で、現在でもその跡が「清水(しつこ)」として保存されている地である。新蔵の家と工場はこの「清水」のそば(現在文化幼稚園のある所)にあつ

た。ここに男女数十名の職工を使用して雁皮、奉書、仙過、唐紙、美濃紙、半紙、手切などを生産し、廃藩置県後は県庁などへの用紙を供給していたのである。

新蔵の腕前がすぐれていたことは明治十年の内国勸業博覧会に和紙を出品し、内務卿大久保利通から次のような褒賞を授与されていることによってもわかる。

明治十年内国勸業博覧会褒賞牒

青森県管下 陸奥国津軽郡富田村

佐々木新蔵

紙

麥稗紙ハ肌滑ニシテ黄ヲ含ミ美ナリ苦木紙檀紙新考ニ出テ大ニ益アルヲ見ル其他各紙質嘉ク所用多シ

右事項ニ因リ花紋賞牌ヲ附与セラレンコトヲ申請ス

(中略)

審査官長 正五位 前島 密

右審査官ノ薦告ヲ領シ之ヲ授与ス

明治十年十一月二十日

内務卿 従三位 大久保利通⁽²⁾

製糸工場は女工数十名を雇い、地方の繭を買い集めて製糸を行い、輸出するほどであったこと、また、陶業は長兄元俊の所有地であった藩主の別邸であった九十九森(現御幸町の弘前女子厚生学院)の境内に大工場を建造し、京都より職工吉兵衛を招き、陶土を京都より取り寄せ製造し、吉兵衛焼と称されたこと、また同時に行った製瓦業の瓦は後に青森連隊の兵舎に使われ、新蔵家の瓦葺は当地の瓦屋根の元祖

であったことなどがわかる。

このように父新蔵は、幕末から明治初期における当地方のすぐれた企業家で、新しい時代の産業のパイオニアであったのである。勿論これは後述するように有名な長兄元俊の指導と影響によるものが大であったことによるのである。

(二) 佐々木家の家系

(1) 先祖

ここで佐々木家の家系についてのべよう。

五三郎の祖父秀庵の兄佐々木元龍が文化十三年八月に藩へ提出した由緒書⁽³⁾によると初代について次のように記されている。

一 先祖 佐々木小三郎永政

高源院様御代寛永五年高四百石被下置、御本参並ニ而足輕拾九人差添、大間越関所御番被仰付罷在候処、正保三年三月十一日病死仕候

すなわち初代佐々木小三郎永政は弘前藩二代藩主信枚の治世の寛永五年(一六二八)高四百石を給され、御本参並の待遇で足輕十九人が差添えられ、大間越関奉行を勤める藩の高給家臣であったことがわかる。正保三年(一六四六)三月病没した。

二代については次のように記されている。

一 二代 佐々木小右衛門永貞

信義公御代

桂光院様御代正保三年親小三郎家督無相違、四百石被下

置、御本参被_二仰付_一、同四年小知行組頭被_二仰付_一、西之浜自分物入ヲ以新田開発仕罷有候処、右新田之内高五拾石御加増被_二下置_一、都合四百五拾石被_二成下_一罷在候処、慶安二年隠居願之通被_二仰付_一、同年九月十一日病死仕候

二代小右衛門永貞は三代藩主信義治世の正保三年（一六四六）親小三郎の家督を継ぎ、高四百石を賜り、御本参を仰せ付けられ、同四年に小知行組頭を命じられた。西之浜（現在の鯉ヶ沢町から深浦町・岩崎村に至る海岸線一帯をいう）を自分の費用で新田開発を行い、新田の内高五十石を加増され、合わせて四百五十石の禄高となった。そして慶安二年（一六四九）九月病死した。

三代は次のように記されている。

一 高祖父 佐々木忠左衛門永範

桂光院様御代親小右衛門家督無_レ相違、高四百五拾石被_二下置_一、新知士並被_二仰付_一、其後小知行組頭被_二仰付_一、相勤罷在候処、伊豆美作出入之節急御用江戸登被_二仰付_一、右御用相済罷下候処勤方不_レ應、御意_二身上被_二召立_一候_二二付_一、砂子瀬村江引越住居仕罷在候処、寛文元年十二月五日病死仕候

三代忠左衛門永範は三代藩主信義の治世に父小右衛門永貞の家督を継ぎ、禄高四百五十石、新知士並となり、その後小知行組頭を勤めていたが、伊豆美作出入（船橋半左衛門・乾四郎兵衛一派と兼平伊豆・乳井美作一派の確執による御家騒動⁴⁾）の節、急に江戸登りを命じられ、御用が済んで帰国したところ「勤め方御意に應ぜず」として身上召上げ、砂子瀬村（現西目屋村砂子瀬）に左遷させられるはめとなった。

佐々木家三代忠左衛門は御家騒動に巻き込まれ、高禄の身分を失ったのである。かくして寛文元年（一六六一）十二月病没した。四代は次のように記されている。

一 高祖父 佐々木茂左衛門永紀

信政公御代天和三年小細工人新規御召抱被_二仰付_一、金参両三人扶持被_二下置_一、相勤罷在候処、其後御加増被_二下置_一、正徳二年金拾両貳歩式人扶持被_二成下_一、小細工人組頭被_二仰付_一、元文二年隠居願之通被_二仰付_一、同三年十二月十四日病死仕候

四代茂左衛門永紀は四代藩主信政の代の天和三年（一六八三）に小細工人として新規に召抱えられ金三両三人扶持を給された。その後加増され正徳二年（一七一一）には金十両二歩二人扶持となり、小細工人組頭に昇進した。四代は武士ではなく職人として藩に登用されたことがわかる。元文三年（一七三八）十二月病没した。

五代は次のように記されている。

一 祖父 佐々木幸益永由

茂左衛門二男二而御座候処、医業仕、弘前住居仕罷有候処、明和六年六月十一日病死仕候

五代幸益永由は茂左衛門の二男で医師となり、弘前で開業していたが明和六年（一七六九）六月病没した。

六代は次のように記されている。

一 父 佐々木正の雍和

親幸益医業相統仕罷在候処、体光院様御代寛政二年十二月廿八日御目見被_レ仰付、同七年二月朔日式人扶持被_レ下置、罷有候処、文化四年十月五日病死仕候

すなわち、六代正の雍和は親幸益の医業を相統し、七代藩主寧親の治世の寛政二年（一七九〇）十二月二十八日御目見仰せ付けられ、同七年二月一日二人扶持を頂戴、文化四年（一八〇七）十月五日病死した。

この六代正の雍和には七男一女の子供がいたが長兄が元龍、その弟が五三郎の祖父秀庵である。

元龍は次のように記されている。

一 私儀

当御代様寛政八年正月十一日御目見被_レ仰付、式人扶持被_レ下置、学校医道御用懸り被_レ仰付、罷有候処、同十年八月十七日医学添学頭被_レ仰付、金六両三人扶持勤料被_レ下置、相勤罷有候処、文化四年蝦夷地騷擾之節ソウヤ御固メ詰合被_レ仰付、翌五年五月帰国仕候処、同月十五日数年学校御用相勤、殊二両年蝦夷地詰合格別勤務之旨御賞被_レ仰渡、是分御給分ヲ以テ表医者御召抱被_レ仰付、並合之御番被_レ仰付、相勤罷有候

七代は寛政八年（一七九六）正月十一日御目見を仰せ付けられ二人扶持を拜領、藩校の学校医道御用懸を拜命、同十年八月十七日医学添学頭に任命され金六両三人扶持を給された。文化四年（一八〇七）の蝦夷地騷擾の際にはソウヤの警固を命じられ翌五月に帰国した。同月十五日には数年の学校御用と蝦夷地警固の功によりお誉めをいただき表医者格に昇進、並合の御番を仰せつかった。

(2) 五三郎の祖父秀庵と父の兄弟

1 五三郎の祖父秀庵

五三郎の祖父秀庵は七代元龍の弟である。秀庵は弘前亀甲町に医業を開業していた。五人の子供に恵まれ、長男が有名な元俊、二男が寛玄、三男が健三郎、四男が五三郎の父新藏、五男が精三である。

2 元俊

五三郎の父新藏に最も大きな影響を与え、また後に五三郎にも影響を及ぼした佐々木元俊から簡単に述べよう。

佐々木元俊は名を宗順^よといい、号を香遠・香遠楼と称した。文政元年（一八一八）十一月八日に生まれた。元俊は父から医業を学び、弘化四年（一八四七）三十歳まで家業を助けた。しかし明るく嘉永元年（一八四八）春、修学を志して江戸へ登り、当時昌平黌に留学中の弘前藩士兼松石居の尽力により蘭学の大家杉田成卿の塾へ入門して蘭学を修めた。杉田成卿は有名な杉田玄白の庶子立卿の子で、儒学、医学、蘭学に秀で晩年蕃書調所教授に任じられた人であるが、当時は本職の傍ら麻布北山伏井戸に私塾を開いていた^⑤。

元俊は初めは学資にも事欠き苦労したらしい。しかし、実弟健三郎の給金の一部の支給や藩の援助によって修学を続けることができた。杉田塾で三年ばかり学んだ後の安政元年（一八五四）頃、江戸麻布で医業を開業した。当時弘前藩から三人扶持を給されて蘭書翻訳にも従事していた。安政三年（一八五六）六月、修学数年に亘るの故をもって帰藩を命じられたが、さらに勉強したい熱意が藩に認められて許され、前同様三人扶持を給された。さらに安政六年（一八五九）には七人扶持が給され新規に小普請医として召し抱えられた。この間元俊は安政四年（一八五七）八月、クラメルスの辞書を翻訳した『蕃語象胥』を著した。また元俊は江戸在中かどうか不明であるが舎密（化学）の

書『厚生含密』三十冊、鉦工業製鍊技術に関する書『鍊鐵訓象』十冊を著している。

文久元年（一八六一）七月幕府は新設した蕃書調所物産局へ元俊を出仕させることを弘前藩に慫慂した。次の史料はそれを示すものである。

万延二年（文久元年）七月津軽越中守家来佐々木元俊儀蕃書調所物産学出役江被_レ仰渡_二候而差支無_一御座候哉之旨御尋之趣奉_レ畏候、然処当月朔蕃書調所勤番組頭ヨリ同様御談御座候間其筋江相達候処、右元俊儀当節用向有_レ之、在所表江差下方之儀申来居候、折柄、折角之御談二ハ御座候得共無_レ據御断候申上候旨、去ル九日御答書差出申候処、猶又同所組頭被_レ申聞候二ハ、断之旨承知致候得共今一応篤重役共而評議之上調所江差出方之儀精々被_二申談_一候、乍_レ去前段不_レ得止事及御断候次第而何分二毛難_{（三）}黙止_二筋合二付、乍_レ随意_一一先在所表江差下方用辯之上追而出府為_レ仕候者其節者御用被_レ仰付共於此度何卒右等之趣宜御聞届置被_レ成下_二度、御尋二付此段申上候_一以上（傍点筆者）

七月十三日 津軽越中守家来 平井修理_{（六）}

幕府の元俊出仕の求めに対し弘前藩は「当節用向有_レ之、在所表江差下方之儀申来居候折柄、近々在所表江出立致候様申付罷在候間、折角之御談二ハ御座候得共無_レ據御断申上候」と回答した。しかし幕府は「断之旨承知致候得共今一応篤重役共而評議之上調所江差出方之儀精々被_レ申談候」と重ねて要求を繰り返し藩当局者を困惑させている。

このような幕府の元俊に対する慫慂ぶりは蕃書調所の創設と共にその教授となった師杉田成卿の推挙によるものであったろうが、元俊の

蘭学に対する学識が幕府方において認められていた証左でもあると考えられる。

竹内運平はその著『佐々木元俊先生』において元俊のこの好機を逸したことを惜しんで次のように述べている。

斯くして先生は藩用あるの故を以て、此の好機を逸し、終生故郷の地にのみ活躍するのやむを得ざるに至ったが、若し此の時、先生がなほ江戸に滞在して、当時日本最高の学堂なる此蕃書調所に於て研鑽を続けることを得たとしたならば、恐らくは陸翁と同じく天下の人材として賞揚せらるゝの人物となつたであらうと思ふ。

陸翁とは有名な陸羯南のことであり、羯南と同じく「天下の人材」として賞揚される人物になったであらうとするこの言はけだし至言であらう。

幕府からの蕃書調所出役の要請に対する弘前藩の弁明が容認され、元俊は文久元年（一八六一）八月、国下りを下命され、弘前学問所内に設立された蘭学堂教授に就任し、家中や在町医の子弟の教育に当たることとなった。

蘭学堂の設置は元俊帰国の二年前の安政六年（一八五九）二月のことであり、弘前藩が幕府からの元俊出役の強い要望に対し、「元俊儀当節用向有_レ之」といって辞退を懇願しているのは、この蘭学堂の教授に元俊を迎え入れることを決定していたからであると考えられる。

こうして蘭学堂教授となった元俊はかつて江戸で世話をした後輩の工藤岩司や木村和一を蘭学堂に呼び寄せ、津軽の蘭学の興隆に尽力した。津軽蘭学の始祖といわれる所以である。

また元俊は津軽の種痘にも大きく貢献した。文久二年（一八六二）三月、疱瘡の流行に際して元俊は医学館に種痘館を設置し、その主任となって種痘に従事するとともに自宅においても希望者に対して無償で施行した。これには元俊の弟元悌も手伝った。こうして明治六年までに種痘を接種した人の数は二万人におよんだと伝えられる⁸⁾。

医学・語学に秀でていた元俊は舎密学にも造詣が深かった。そのため医業の傍ら大いに国産の増進に力を尽くし藩の産業発展に貢献した。

その第一に挙げられるのは、舎密精錬所を富田村にある藩主の別邸であった九十九森の地に設けたことである。ここで硝石や火薬を製造した。これは藩の軍制改革に伴って兵器の整備や海防に大いに役立ち、戊辰戦争の際、弘前藩の大きな力となったのである。

第二は鉱山業の開発を指導したことである。舎密学にも秀でていた元俊は藩内における鉱物資源の調査を行い、西津軽郡館岡村（現木造町）海岸の地層より石炭に似た物質の発見や久渡寺のマンガンの発見などがそれである。また明治元年五月、百沢村三本柳におけるカルキ鉱製造、同六月、黒石における貝灰焼立法ならびにホットアス、その他火薬製造の教習などもそれに数えられる。

このように数々の業績の他、特記すべきものに明治六年旧青森病院の創設がある。

維新後最初ノ旧青森病院ハ佐々木元俊指導幹旋之上開院シ、尚旧木造病院、弘前病院ヲ開設シ是ニ従事セル医師ハ何レモ元俊ノ門下生ナラザルハナシ⁹⁾

旧青森病院というのは明治六年、青森町の有志が集って設立した私

立病院「済衆社」のことであり、本県における病院組織の医療機関としての嚆矢である¹⁰⁾。この病院に元俊は指導助言し、開院に手助けしたのである。当時、津軽の地で随一の学識を有する元俊としてはけだし当然のことであつたろう。なお、その後木造病院や弘前病院が開設されたが、これに従事した医師は何れも元俊の門下生であつた。

津軽の蘭学の祖といわれる元俊は明治七年十二月十六日、五三郎の父新蔵宅で没した。ときに五十七歳であつた。元俊の墓は現在宝泉院にあるが、正面の「香遠佐々木元俊墓」の字は勝海舟の揮毫である。

3 覚 玄

次男覚玄は文政五年（一八二二）の生れで、比叡山延暦寺に学び三部傳燈阿闍梨堅者法印の称号および大僧都の位を授けられ、帰国後弘前新寺町の報恩寺の住職となり、晩年弘前胸肩神社の神官となった人物である。明治二十八年七十四歳で病没した。

4 健三郎

三男健三郎は『佐々木元俊先生』に次のように記されている。

「曾て公用を以て大坂に赴いたが、偶時勢の処を察して脱藩し、京都に至って勤王の志士と交つた。東北戦争起るや奥羽征討使澤三位公に随従し、維新後には箱館裁判所清水谷公考の下に仕へた。其後の経歴に対して特別記すべきものを今持合せて居ない。明治十年富田紙漉町一番地の弟新蔵宅に於て没した¹¹⁾。」

これによって、三男健三郎は公用で大坂登りの際脱藩し、勤王の志士となり、戊辰戦争の際には奥羽征討使沢三位に従って活躍し、維新後には箱館裁判所清水谷公考のもとに仕えたことがわかる。その後弘前に帰り、明治十年弟所蔵宅で没した。

5 精三

五男精三は医師であり事業家であった。『佐々木元俊先生』に次のように記されている。

五男精三は始め玄貞（元悌）と称した、先生の跡を継いで杉田の塾に遊び、帰って医学堂の典句となった。万延二年津輕藩にてスクーネル型の船を建造せし時、目屋村田代山より石炭を得てテールを製してこれを実用に供した。慶応年間再び江戸に学び、帰国後弘前にて医を開業したが明治十二年田名部町に移り傍ら猿ヶ森の石炭山を始め炭山事業に没頭した。⁽¹²⁾

これによると五男精三は号を玄貞又は元悌と称したこと、長兄元俊の跡を継いで杉田塾に学び、帰国して津輕藩蘭学堂の典句をつとめたこと、万延元年（一八六〇）目屋村田代山より石炭を発見、タールを製造して実用化したこと、慶応年間に再び江戸に学び、帰国後弘前で医業を開業したが、明治十三年下北田名部の猿ヶ森で石炭業に没頭したことがわかる。

万延元年（一八六〇）のタール製造とは、当時建造した西洋型帆船青森丸やその他台場や砲台などの塗料に使用するためのものであった。精三も兄元俊と同様に蘭学と舎密学に通じ、医師として秀れた腕前をもった人物で、明治六年旧青森病院の副院長を一時つとめたといわれる。しかし、医業より実業に関心が深く、下北の東通村の猿ヶ森で石炭の採掘事業に取り組むこととなったのである。

彼が猿ヶ森で石炭を掘るに至ったのは、県内の石炭埋蔵地を調査の結果、猿ヶ森のトド森が石炭の埋蔵地の中心であることが判明したからでヒヤウキ山二町歩を買い上げて事業に着手した。ここで産

出する石炭は品質の粗悪な亜炭であったので事業には多くの困難が伴った。彼は困難にもめげず事業を推進した。しかし、精三の事業は積年の尽力にもかかわらず明治三十年失敗に終り、そのことが五三郎の人生に大きな影響を与えることとなるのである。

(3) その他一族の有名な

五三郎の佐々木家はこれまでみたように医者を多く輩出している家柄であり、中でも叔父元俊や元悌は有名である。しかしこの他にも世間に名を知られているのは父新蔵の従兄弟の孫にあたる佐々木文蔚と同じく従兄弟の子にあたる中田実である。

佐々木文蔚は東京大学医学部の第一回生で、明治十二年卒業後島根県松江病院長となって赴任し、後、海軍軍医学校の教官に転じて海軍大軍医となり、フランスに赴き、同国製造の水雷砲艦千島八百噸に乗り組み、廻航の途中明治二十五年、愛媛県沖で英船ラヴェンナ号と衝突し沈没に際し殉職した。⁽¹³⁾

中田実は後に陸と改め、司法省法律学校に入り、その後幾多の辛苦を嘗めつつ修学を遂げ、明治二十二年、日本新聞社長となり、羯南の名をもって健全な国家主義に立ち、堂々の論陣をはって時の政府の心胆を寒からしめたことで有名である。また正岡子規を庇護し、大成させた人としても知られている。

(4) 五三郎の兄弟

五三郎には三人の兄弟がいたことが判明している。長兄の金太郎、弟の惣太郎、二女のはるの三人である。金太郎は後に文美と改名した。文美は開成所卒業後、外務省翻譯局に勤め、その後山口高等商業学校教授を勤めた。弟惣太郎は日露戦争で従軍中に病死、妹はるは函館の奈良家に嫁いでいる。

次頁に佐々木家の系図を示しておいた。



(三) 生い立ち

このような父新蔵のもとに生れた五三郎は普通だと幸せな生活を送れるはずであったが、母や父の死によって思わぬ道を歩むこととなった。『弘前愛成園史』に次のように記されている。

不幸にも明治十年に父新蔵氏が亡くなると、工場経営はばらばらになってしまった。五三郎氏の母も五三郎氏が生れて数日後不幸にも他界してしまったので、恰度近所で米搗屋の成田さんの家で幼児を亡くして、母乳が余っていた関係上、その家の里子になったのである。而して青年時代の五三郎氏は成田家の一員として水車小屋の米搗場で働きながら、当地の東奥義塾校に通学したのである。⁽¹⁴⁾

また『弘前愛成園史』の翌年に出版された『菊池九郎・佐々木五三郎・大宰治(上)』の「佐々木五三郎」の中で同じ著者三浦昌武は次のように記している。

五三郎は生後間もなく母に死別し、近所の成田藤之丞家に預けられ、貰い乳で成長し、籍も成田家に入籍し、青年時代も成田の家族として水車小屋の米搗場で働き乍ら義塾に通い、明治十七年義塾卒業後も成田家の精米業を手伝っていたのであります。⁽¹⁵⁾

これによって、

- 一、五三郎の母は五三郎を生んで間もなく他界したこと
- 二、成田藤之丞家に里子に出され、やがて養子になったこと

三、父新蔵が明治十年五三郎七歳のときに他界し、経営が瓦解したこと

四、成田家の家族として水車小屋で働きながら、東奥義塾に通学し、明治十七年卒業し、卒業後も精米業を手伝ったことがわかる。

ここで立派な事業家であった父新蔵が五三郎を成田家に養子に出したのは単に母が死亡し、母乳の必要からだけであったのだろうかという疑問が生ずる。これについて五三郎の弟惣太郎の孫の佐々木陽一は「私が伯母はな(五三郎の姪、元悌の養女)から聞いているのは、母の実家に男子がなく養子となったが、その後男子が生れたので佐々木に復姓した」との指摘がある。⁽¹⁶⁾これによると成田家は五三郎の母の実家で、後継ぎがないために養子になったことになる。

しかし、この点については現在のところ確証がないので母の名前や死亡年月日の解明とともに今後の課題としておきたい。

五三郎は明治十七年東奥義塾校を卒業後、上京して英学に志したが病氣となって帰郷したという。⁽¹⁷⁾しかしその詳細は明らかでない。

こうした五三郎に転期が訪れたのは、明治二十六年、五三郎二十六歳の時である。十月十二日本家の長男元四郎が早逝したので、五三郎が佐々木家を継ぐこととなり成田家より離籍した。

本家佐々木家は弘前市本町一丁目「赤格子」という屋号で薬種商を営んでいた。こうして五三郎は薬種商の店主となったのである。

この「赤格子」は叔父元俊が明治に開いたもので弘前では有名な薬店で、人々は「あかごし」と呼んで親しんでいた店であった。元俊に子がなかったので弟元悌がその跡を継ぎ、元悌にも子がなかったので元四郎⁽¹⁸⁾が跡を継いでいたのである。

明治二十八年、五三郎は新寺町の浄土宗西福寺工藤順了長女たかと

結婚し、新しい人生のスタートを切った。しかし明治三十年、思わぬことが惹起した。叔父元悌が下北猿ヶ森において営んでいた鉱山業が失敗し、そのあおりをうけて、本町一丁目の店舗を人手に渡さなければならなくなった。

無一物になった五三郎は、この苦難に負けてなるものかと心に固く誓い、捲土重来を期して奮闘した。再び葉種商を営むまでに漕ぎつけ「赤格子」を買い戻すことができたのは明治三十三年のことである。この間、明治三十年四月には長男俊一、翌々年には長女テル、さらに翌々年次女とし子が誕生、家族が五人となっていた。

二 東北育児院創設の動機

（一）明治三十五年の大凶作

佐々木五三郎が孤児救済に乗り出したのは明治三十五年十一月三日、自宅に東北育児院を開設したときのことである。その創立の動機について五三郎は次のように述べている。

抑モ天理ヲ鑑ミ人道ニ則リ博愛慈善ノ厚德ヲ宣揚スルハ独り是レ人間霊長タル大本ノミナラズ社会ノ幸福安寧ヲ増進保持スル常道ト謂フベシ、当園ハ茲ニ深ク思ヒヲ致スル所アリ世上ノ可憐ナル不幸児ノ為メ社会的救済保護ノ緊切ナルヲ痛感シタリ、時恰モ明治三十五年青森県大凶歳ノ秋ナリキ当時初春ヨリ天候其ノ順ヲ失ヒ秋ニ至ルモ五穀稔ラズ県下ヲ挙ゲテ荒歉ノ惨況ニ陥ラシメ官民其ノ救護ニ勞セリト雖モ草根木皮猶ホ其ノ飢ヲ医スルニ足ラズ貧童孤児ノ頭路ニ徘徊シテ食ヲ求ムルモノ漸ク多ク其ノ窮乏ノ状心アル者ヲシテ涙ヲ催サシム、然レドモ我が県下ニハ未ダ此等ノ貧童孤児ヲ收容シテ之レヲ救済加護スルノ機関設備ナシ茲ニ於テ

不肖奮然身ヲ以テ此事業ニ盡力セント決心シタル所以ナリ。⁽¹⁹⁾

「抑モ天理ヲ鑑ミ人道ニ則リ博愛慈善ノ厚德ヲ宣揚スル」ことは万物の霊長である人間の「大本」であるのみならず「社会ノ幸福安寧ヲ増進保持スル常道」というべきである。ここに深く思いをして「世上ノ可憐ナル不幸児ノ為メ社会的救済保護ノ緊切ナルヲ痛感シタ」とするこの冒頭の文章は、五三郎の思想と教養を伺い知る重要な文言である。このような普遍的な人類愛を抱いていた五三郎にとって明治三十五年に襲来した青森県の大凶作による惨状は耐え難いものであった。貧童孤児は路上に徘徊して食を求めるものが多く、この窮乏した状態は五三郎をして涙を催すほどであった。しかしながら、県下にはこれらの貧児孤児を收容し救済保護する機関や設備が全くない。ここにおいて五三郎は「奮然身ヲ以テ此事業ニ盡力セント決心シタル所以ナリ」と育児院創設の動機を述べている。

ここで明治三十五年の大凶作の実態をみよう。

『青森県議会史』に次のように記されている。

明治三十五年の凶作は、明治二年あるいは大正二年に比べると被害の程度は若干軽るかったが、青森県設置以来の大凶作として記録さるべきものである。

この年は春以来気候が不順であった。真夏でも冷氣が強かったので、県農事試験場では不作予防対策として、草取りを早目に切りあげて、水切りを早くするように、県農会や郡農会を通じて指導し、各都市役所もその方針で農家を督促した。ところが稲作に一番大切な二百十日を迎えると、気温は馬鹿陽気に上昇し、二百十日後の三日目から二日間はこの年の最高気温となった。即ち八

月二十八日頃までは辛うじて二十五度前後であったものが二十九日は三十度五分、三十日は二十九度一分と昇り、九月一日は二十八度二分、二日は二十八度四分となったので稲草が急に若返った。それに悪いことには三日から二十六度台に下り、それに三日間大風が続き、二百二十日までには風雨さえ交えた悪天候である。県では冷害を予期して水切りを早くするよう指導して万全を期したのであるが、二百十日後の高温は予測に反したもので、応急の方法もなく、その後も低温が続く凶作を見たのである。同年の作付反別五万五千八百町歩に対し、収量は三十四万七千石、反当収量は六斗二升二合に過ぎず、特に南部地方は被害甚大で、上北郡の如きは一粒の收穫もなかった。⁽²⁰⁾

すなわち、明治三十五年の凶作は青森県設置以来の大凶作で、特に南部地方は被害が多く、中でも上北郡は收穫皆無という状態であったことがわかる。これに対して津軽地方の稲作の被害は南部地方に比して軽かったが、半作から六分作であったとされている。

大凶作の結果、米価が高騰し貧困者の生活は困難をきわめた。弘前においても米価の高騰は大きな問題となった。そのため明治三十五年十月五日長尾弘前市長は貯穀金支出を提案した。しかし、この提案は管理委員二名の反対によって退けられ実現なかった。その間の事情を「東奥日報」は次のように報じている。

弘前市に於ては米価暴騰の今日、細民の困難黙過し難きを感じ、長尾市長は目下開会中の市会へこれが救済策を協議し、其結果同市民一般の貯蓄に係る貯穀金でうものを此際支出して、外国米を買入れし先例に倣い、施与若くは札米等相当救済方法を一応同管

理委員に内議することになりたるを以て、去る一日委員山内金三郎、柗木卯太郎の両氏を市役所に参集を求め、佐田助役より詳細協議に及びたるところ、当節は米価の騰貴は成るほど異常と云ふべしと雖も、本年の不作はこの後米価の騰貴測り難く、殊に冬期に至り薪炭、衣類等其他の必要により雑費を要するに於て、米価は今日の儘なりとも其困難を感じるの度益々甚だしく、且つ貯穀金の支出は先例により、市内重立諸氏の救済につき行いつつあるものなれば、先づこの内議の趣きは差当り承諾し難しとのことにて、一段落を告げたりとのことなるが、成るほど昨今のところは別して細民の嘆声を耳にせざるも、日増し冬季に近づき、ソレ炭ソレ薪、または衣服と云ふが如き諸種の方面に於ける支出の必要を感じなば、細民の困難察するに余りある次第なれば、富豪諸子の救済の任に当らざるべからざるを以て、重立たるもの予め一町の議を纏め、委員なり惣代なりを撰定し、一市の委員会を組織し、今より相当の救済策を確定し置くべきは富豪諸子の任務なりと古老共は話し合へり⁽²¹⁾と

「日増し冬季に近づき、細民の困難察するに余りある次第なれば、富豪諸子の救済の任に当らざるべからず」と急ぎその救済策を確定することを「東奥日報」は富豪諸子に求めている。

この「富豪諸子」というのは地主階層や新興の金融業(金貸や銀行)、商業によって財をなした地方の政治、経済を牛耳っている人々のことを指している。

津軽地方においては明治十四年の松方財政の進展によって農民は土地を手放さざるをえず、その結果土地を集積した大地主が簇生した。しかし彼等大地主は贅沢な邸宅を建てたり庭園を造ったりすることは

あっても困窮者——例えそれが自分の小作人であっても——に対してすすんで救済の手を差しのべるということは殆んどなかった。

こうした状況の中で凶作の影響は当然であるが学校教育にも深刻な問題を提起していた。

それは「東奥日報」の次の記事によって明らかである。

凶作と学校の影響

劣作の結果、本県各地方とも此後生活の困難如何あるべきやは察するに足るべきこととなるが、中津軽郡に於ては本年劣作の影響と見え清水村外十ヶ村組合立玉成高等小学校にては、去月末にて九十余名の退学生を生ずるに至りしを以て、本月一日より一学級を縮めたりと。

また千年村部内大和沢尋常小学校にては、在学生百二十九名の処、欠席勝ちの者多く、即今出席生徒三十余名に過ぎざりしと。⁽²²⁾

この中津軽郡清水村というのは弘前市の隣村であり、千年村も同じで現在は弘前市となっている地区である。清水村外十ヶ村組合立の玉成高等小学校では去月末で九〇余名の退学者を出し、一学級を縮少した。また千年村の大和沢小学校では在学生二一〇名中欠席者が続出し、出席生徒数は三〇余名にすぎなくなったという深刻な状況となっていたのである。

「速かに餓死者を救へ」と新聞社は義損金の募集に立ち上り、県内在住の宣教師の救済活動も活発であった。また在京の日本郵船重役飯田翼、総持寺貫主西有穆山、青山学院長本多庸一、太陽編輯長鳥谷部銃太郎、日本新聞社長陸実、農商務省技師広沢井二ら青森県出身の名士らも救済運動を起した。⁽²³⁾

五三郎が孤児救済を決断したのはこのような状況の秋のことである。五三郎はある霜枯れの秋、哀れな一人の孤児と出会った。そして決然貧児の救済を決心するに至るのである。

(二) 石井十次との出会い

佐々木五三郎をして困難な孤児救済事業の必要性を開眼せしめるに至ったものは、東北育児院創立二年前に弘前を訪れたわが国社会事業の大先達石井十次の講演であった。

『弘前愛成園史』に次のようにある。

明治三十三年、岡山孤児院の創立者で我が国の社会事業の開拓者である石井十次先生が、当地弘前市に於て講演をした際に、五三郎氏はその話を聴いて強く感動した。殊に当時この青森県に貧困孤児を救う施設の全くない事は、五三郎氏の胸を痛く打ったのである。⁽²⁴⁾

石井十次は明治二十年九月、わが国最初の孤児救済施設である孤児教育院（岡山孤児院）を岡山大道三友寺内に開設し、わが国の民間社会福祉事業の大先達と仰がれている有名な人である。敬虔なキリスト教徒であった石井は「予は孤児の友なり、盲啞の友なり、病者の友なり、寡婦の友なり、囚人の友なり」の信念に基づき、最も弱者である孤児救済を身を挺して実践した。しかし孤児院の経営と教育には多大の経費を必要とし、経営資金募集のため院児の青年九名で音楽隊を組織し、明治三十一年二月五日より全国を巡回して天下の有志に訴えた。その音楽隊一行が明治三十三年に弘前に来たのである。

『石井十次日記』によると、そのことは次のように記録されている。

音楽幻燈隊東方運動一覽⁽²⁵⁾

開会地	開会日	開会数	集金高	本売高	新賛助員
堺市	六月十二	二回	二四三、〇・六	二五、八七五	八三
大津市	同 十六	三回	二七一、八八〇	一七、七二〇	八五
函館区	同 廿三	三回	二〇七、七〇〇	七七、七五	一五四
札幌区	同 廿九	二回	六・七、三四二	四七、八二〇	一五五
小樽区	九月 三	二回	六六五、九〇六	四六、〇二五	一四〇
岩見沢	同 七	一回	一五三、〇一〇	一六、六八〇	二三
旭川	同 十二	一回	一三〇、〇〇〇	五一、六〇〇	八四
滝川	同 十四	一回	一九三、八九〇	二六、六七〇	四一
佐留太	同 十五	一回	五四、五〇〇	三、七〇〇	
門別	同 十六	一回	三九、〇四〇	二、八五〇	一二
下下方	同 十七	一回	五、九四〇		
荻伏	同 十八	一回	一六一、九八〇		
浦河	同 二十	一回	一九四、二五〇	六、七〇〇	七八
青森市	同 廿七	二回	六三六、八・九	八一、五〇〇	六七
藤崎村	十月 一	一回	六三、一二四	七、五〇〇	一三
弘前市	同 四	三回	七三〇、一二七	一〇四、四〇七	七七
二十六ヶ所	五十一夜	五十回	八八六〇、四二四	八六二、八八三	一、五八八

これによると石井は六月十二日の堺市を皮切りに近畿・東海・関東の各地を巡回し、八月二十二日北海道函館市に入った。その後札幌・小樽・岩見沢・旭川・滝川・佐留太・門別・下下方・荻伏・浦河と北海道各地を回り、青森県に来たのは九月末のことである。

青森県における石井の講演は、青森市、藤崎村、弘前市の三カ所で行われ、青森市は九月二十七・二十八日の二回、藤崎村は十月一日一回、弘前市では十月二・三・四の三日間に三回行われていることが判明する。講演の場所については記載がないので判明しないが、恐らく教会ではないかと推測される。五三郎がこの三回の中のいずれかの講演を聞き深い感銘を受けたものと推察される。

この時の青森市の集金高は六三六円八一銭九厘、本売上高六円七〇銭、新賛助員七八名であり、藤崎村は集金高六三円一二銭四厘、本売上高七円五〇銭、新賛助員一三名である。これに対し弘前市の集金高は七三〇円二三銭七厘、本売上高一〇四円四〇銭七厘で新賛助会員になった者が七七名である。

この石井十次との出会いは五三郎にとっては大きな感動というよりも孤児救済事業に対する開眼ともいうべきものでなかったかと推察される。

というのは、五三郎が学んだ東奥義塾は明治五年、菊池九郎らの尽力によって建設された当地方の名門校で、教科書は慶応義塾と同じものを使用し、東奥の義塾をめざした学校である。五三郎が入学していた明治十四年頃は塾長が有名なクリスチャンの本多庸一で、義塾が自由民権運動の牙城となった時代である。多感な青春時代のことゆえ五三郎も多くの影響を受けたのではないだろうか。

そのような五三郎が敬虔なクリスチャンである石井十次の孤児救済の訴えを耳にしたのである。定めし石井の説く熱誠は五三郎の心の琴線に強く触れたのではないだろうか。

三 東北育児院の創設

（一）自宅に育児院を創設

五三郎が孤児救済のための東北育児院を自宅に創設したのは明治三十五年十一月のことである。

我が東北育児院ハ明治三十五年十一月ヲ以テ弘前市大字本町ニ創設シタリ當時初春ヨリ天候其ノ順ヲ失ヒ秋ニ至リテ五穀稔ラズ県下ヲ挙ゲテ荒歉ノ慘境ニ陥ラシメ官民其ノ救護ニ勞セリシモ草根木皮尚ホ其飢ヲ医スルニ足ラズ貧童孤児ノ路傍ニ徘徊シテ食ヲ求ムルモノ漸ク多ク其ノ苦窮ノ状心アル者ヲシテ涙ヲ流サシム、然レドモ我が地方ニハ未タ此等ノ貧童孤児ヲ收容シテ之レヲ教育加護スルノ機関設備ナシ是ニ於テ不肖五三郎ハ奮然身ヲ以テ此等貧童孤児ノ教育ニ尽力セント決心シ爾來其ノ家業ヲ抛チテ一方ニハ孤児等ノ收容ニ努メ一方ニハ衣食ノ資ヲ得ンガ為メ各地ニ行商ヲ始メ辛苦經營茲ニ四年ノ星霜ヲ閲ミセリ此ノ間孤児ヲ收容スル三十余名ニ及ビ内逃亡若シクハ事故退院セルヲ除キテ現在收容教育ノ児童二十一名ナルモ年ヲ逐フテ尚ホ増加スルハ疑フ可ラス然ルニ本院ハ初メヨリ孤児收容舎ヲ建築シタルニアラス只院主五三郎ノ住宅ニ家族ト同棲セシメ来リタルガ諸種ノ事情ノ為ニ数々其ノ居ヲ転シタルノミナラス児童ノ数二十余名ノ多キニ至リテハ現在ノ屋舎大狹隘ヲ告ケ飲食起臥ノ困難実ニ名状ス可ラス一朝惡疫生スルナランカ總テノ児童ヲシテ同一室ニ苦惱呻吟セシムルノ慘境ニ陥ラサル可カラス是レ実ニ院主五三郎ノ忍フ能ハザル所タリ是ニ於テ本年初春ヨリ院舎新築ノ計画ヲ立テ慈善篤志家ノ贊助ヲ仰キテ売地ヲ弘前市新寺町ニ購フヲ得タリ故ニ直チニ建築工事

ニ着手セントノ意向ナルモ不肖五三郎微力ニシテ其ノ一分ノ資ヲ弁スルヲ得ズ今ハ只々四方篤志家ノ博愛義侠ノ同情ニ訴ヘテ新築ノ素志ヲ果タスノ外ナシ四方博愛慈善ノ情ニ富メル兄弟姉妹ヨ願クハ我が育児院ノ素志ヲ達セシムルニカヲ副ヘラレヨ是レ五三郎懇願シテ己ム能ハザル所ナリ（傍点筆者）

明治三十八年七月

東北育児院主 佐々木五三郎⁽²⁶⁾

これは明治三十八年七月に出された建設賛助募集趣意書である。

これによって五三郎が一大決心をして本町の自宅で孤児救済に当たったことが明瞭である。この年に收容された孤児は二人であった。以後年々收容孤児は増加の一途を辿り、三年後には二〇余名を数えるようになり、宿舎が大狹隘を告げるようになった。そのため五三郎は院舎の新築を計画、慈善篤志家の賛助を仰ぐこととなりこの趣意書となったのである。

一大決心をして自宅に東北育児院を開設した五三郎は、これ以降「其ノ家業ヲ抛チテ一方ニハ孤児等ノ收容ニ努メ一方ニハ衣食ノ資ヲ得ンガ為メニ各地ニ行商ヲ始メ辛苦經營」するに至るのである。

当時の状況について語るものはこの趣意書以外に見当たらないが、開院三ヵ月後に入所した後年、五三郎の長女の婿となり、五三郎を支えた佐々木寅次郎は育児院設立当初のことを次のように語っている。

当時私が收容された育児院は、一丁目の柏田と云う家に間借りで、收容者は福士清春と云う五つ年上の子供と三つ年下の子供と私の三人でした。然し年内に院児も増員したので、其の年に柏田家より二軒隣の三浦家の店を借りて移転し、ここを院舎にしていたのですが、益々院児が殖えてどうにもならず、止むなく弘前

表2 5円以上の寄附者(名誉賛助員)一覽

10円	山口 彰 真	職業・役職
山 田 惣次郎	長勝寺住職	
中 谷 熊太郎	味噌・醤油醸造業、米穀商	
藤 田 久次郎	酒造業(ぶどう酒)	
宮 川 久一郎	酒造業、呉服木綿商、第五十九銀行、弘前商業銀行、弘前農具社の重役	
宮 本 甚兵衛	小間物商、実業家、貴族院議員	
5円		
中 嶋 松太郎		
佐 藤 武 城		
佐 藤 誠四郎	弘前電灯株式会社、弘前倉庫社長	
永 井 準 助		
山 崎 峰次郎		
田 辺 富 吉		
山 田 末 吉		
村 谷 金 蔵		
宮 本 健 三	宮本甚兵衛の弟、呉服商	
加 藤 幸 助	味噌・醤油醸造業、米穀業	
町 田 才之丞	農業肥料販売	
菊 池 定次郎	酒造業、弘前商業銀行創立	
野 村 音次郎	酒造業	
一 戸 善三郎		
葛 西 宇八郎	運送業	
工 藤 順 了	西福寺住職	
玉 田 べ ん	酒造業	
福 島 藤 助	酒造業	
野 村 忠兵衛	酒造業、弘前商業会議所第3代会頭(明治43)	
宮 川 平 吉		
福 永 由太郎	履物業	
宮 川 富太郎	宮川久一郎の弟、木綿卸業、「角み」デパート創立(明治42)	
関 藤 吉 八		
佐 藤 才 八	酒造業、弘前電灯株式会社、弘前銀行の重役	
松 木 合 資 会 社	酒造会社、社長松木彦右衛門は貴族院議員	
宮 川 忠 作		
中 畑 異 三		
宮 川 富三郎	酒造業	
斉 藤 内 七		
石 坂 圭 一		
岩 渕 惟 一	元弘前藩用人、第五十九銀行頭取(明治31~41年)	
木 村 敬 一		
菊 池 健 雄		
石 川 三治郎		

注：職業・役職は『弘前商工会議所六十年史』『青森県人名事典』『ここに人ありき』第6巻などによる。

表1 開院当初の收容児童数と在院児童数

		収 容 児 童			在 院 児 童			
		男	女	計	男	女	計	実在院児
明	35	3	3	6	3	3	6	5
"	36	4	3	7	7	6	13	12
"	37	8	6	14	15	12	27	18
"	38	9	4	13	24	16	40	23

注：收容院児の計と実在院児との違いは、途中退院児があったことによる。

『菊池九郎、佐々木五三郎、太宰治(上)』73頁より作成。

市新寺町六十二番地、今の円明寺裏の桑畑六百坪を買収することが出来、又弘前市の亀甲町櫛引醤油会社の裏の織物工場をも買収しました。

この資金は、市内篤志家の寄附金五百円也を得て、建築までして其の十一月に育児院の移転を見たのであります。

これによってみると、まず開設当初は孤児が三名で一丁目の柏田家に間借りしていたこと、院児が次第に増え翌年には二軒隣の三浦家の店を借りて移転し、ここを院舎にしていたこと、ますます院児が増えてどうにもならなくなって市内の篤志家に寄附金を仰ぎ、新寺町の円明寺裏に移ったことがわかる。

開院当初の收容児童数と在院児童数は表1のとおりである。

(二) 新寺町に新院舎建設

五三郎の呼びかけに賛同した弘前市の篤志家は多く、寄附金は五百円も集った。その氏名と職業を示したものが表2である。

表2によると、十円の寄附者は六名、五円の寄附者は三四名、計四〇

名の名譽賛助員となっている。これら名譽賛助員の職業・役職をみる
と当時の弘前の著名な知識人や財界人ばかりであることがわかる。

例えば十円を寄附した山口彰真は、藩主の菩提寺であり禅林三十
三ヶ寺を統率する長勝寺の住職である。宮川久一郎は呉服・木綿商で
弘前財界の中心的人物であり、宮本甚兵衛は小間物商で当時貴族院議
員である。五円を寄附した岩渕惟一 は元弘前藩の用人で第五十九銀行
頭取という経済界の重鎮であり、酒造業の松木合資会社社長松木
彦右衛門は貴族院議員である。

城下町弘前は藩政時代から酒造や味噌・醤油など醸造業の多い土地
柄であるがそれらの多くの人々がここに名を連ねている。中谷熊太郎、
藤田久次郎、加藤幸助、野村忠兵衛、佐藤才八、宮川富三郎などがそ
れである。その他、呉服・木綿・米穀・履物商、さらに新興の肥料商
や運送業などで名をなした人々がここに名を連ねている。

このように宗教界をはじめ、実業界の名士ともいべき当時の弘前
の実力者より多額の寄附を寄せられ支持されていたのは五三郎にとっ
て辛いことであった。この理由は何であろうか。推察するに一つは
五三郎の真摯で誠実な人柄であり、二つには五三郎の生家の信頼によ
るものではなからうかと考えられる。

あとがき

以上、佐々木五三郎の生家と生い立ち、育児院創設の動機、育児院
創設と新院舎の建設について考察してきた。

五三郎はこれまで父の死後孤児になったかのごとき著作が多いが、本
稿による生家や家系、さらに兄弟親類の存在の実証によってそれが訂正
を要することや、その家系が古く、医者を多く輩出していた名門で人々の
信頼があったことが弘前市民の多くから援助を集めることができ育児院

経営に大きく寄与していることが明らかにできたのではないかと思う。
本稿作成に当っては弘前愛成園理事長三浦昭子氏の御協力を仰ぎ、
特に静光園々長の佐々木陽一氏、佐々木寅次郎の長男である佐々木義郎
氏、次男の弘前清園老人福祉センター次長佐々木健次氏より数々の資
料提供と御教示をいただいた。付記して謝意を表したい。

註

- (1) 二二―二三頁
- (2) 二二頁
- (3) 佐々木陽一氏蔵
- (4) 三代信義の御守役として江戸から随行した船橋半左衛門・半十郎父子の
専横が原因で起ったので船橋騒動ともいう。騒動は寛永十一年（一六三四）
八月に起り、同十三年（一六三六）正月、幕府の裁断が下され、船橋と乾
は松平隠岐守へ、兼平と乳井は毛利甲斐守へ預けられた。
- (5) 『佐々木元俊先生』五頁
- (6) 〃 八―九頁
- (7) 〃 九頁
- (8) 『青森県人名事典』二七―二八頁
- (9) 『香遠先生伝記』『佐々木元俊先生』一八頁
- (10) 松木明知『青森県の医史』九九頁
- (11) 七頁
- (12) 六六頁
- (13) 佐々木陽一「創始者佐々木五三郎をめぐる明治期の身寄りの人々」
六頁
- (14) 六六頁
- (15) 六六頁
- (16) 佐々木陽一 前掲著
- (17) 『青森県人名事典』二七頁
- (18) 元四郎の詳細は明らかでない。
- (19) 『東北育児院三十年小史』三頁
- (20) 『青森県議会議史』自明治二十四年至明治四十二年 五七六頁
- (21) 〃 〃 五八一頁
- (22) 〃 〃 五八二―五八三頁
- (23) 〃 〃 五八一頁
- (24) 七頁
- (25) 『石井十次日記』（明治三十三年）八九―九〇頁
- (26) 『弘前愛成園史』二二―二三頁
- (27) 『愛成』三三